

J. プリーストリ像 — ひとつの補遺 —
Images of J. Priestley — a supplementary note —

杉山忠平
SUGIYAMA Chūhei

1992年5月にエディンバラ大学18世紀研究グループの主催によるジョウゼフ・プリーストリについてのシンポジウムが開かれたらしい。なぜエディンバラでプリーストリが、という疑問は別として、知友から送られたそのときの展示目録⁽¹⁾をみると、居宅とともに焼けた蔵書中わずかに残ったものの一冊としてマンドヴィルの【蜂の寓話】があったり、プリーストリの法学博士号取得関係の資料、彼の科学的業績をたたえる文献等があつて、それなりに興味深いのが、プリーストリ自身の著作は全40点中13点にとどまる。これにたいし一橋大学社会科学古典資料センター所蔵のプリーストリの著作は18点（重複書を加えると、さらにふえる）にのぼる。遠い日本でのこのような所蔵ぶりは、誇りとしてよいかもしれない。

プリーストリ自身のものでなく、プリーストリにかかわるもので、同センター所蔵の一文献について、わたしはかつて一橋大学図書館の【鐘】にエッセイふうの短い文章を書いたことがある⁽²⁾。

いまここでの目的は、おなじくプリーストリ自身のものでなく、プリーストリにかかわるいくつかの文献から、ただし同センター所蔵の有無をはなれて、同時代のプリーストリ観の若干の例を、これまたエッセイふうにみでみることである。その意味でこれは、わたしのひとつのプリーストリ補遺ないし余滴とでもいうべきものだといいよう。

プリーストリにたいする人びとの態度にはさまざまなタイプがあつた。彼を「デマゴグ」ときめつけ⁽³⁾、さらには「フランスのスパイ」⁽⁴⁾、はては「ばかものでならずもの」⁽⁵⁾とまで呼んだウィリアム・コベット——後年の彼らしからぬ——に一例をみるような、はげしい政治的敵意はその一つである。そして、いうまでもなく、バーミンガムの聖職者エドワード・バーンヤスペンサー・マダンに代表されるような宗教的憎悪もその一つである。

もちろん、国教派がすべて高教派だったわけではなく、国教派のなかにもプリーストリの友人はいた。友人は別としても、バーク批判の必要を説き、言語・信仰の自由とプリーストリとの擁護を書いた一匿名論文の筆者は、国教会のなかの公正な例外のひとりとしてサミュエル・パーの名をあげている⁽⁶⁾。

パーについていえば、彼がプリーストリやバーミンガム暴動についてまったく偏見から自由だったわけではないが、たしかに彼はプリーストリの誤りや独断やを批判することと彼の学問的業績や才能や人格を否定することとは別だといひ、とくに彼の人格のなかに「有徳な原理の深い根と有徳な習性の堅固な幹」を率直に認めている⁽⁷⁾。

このほかにも、当然ながら、さまざまな人びとがさまざまにプリーストリをみていた。自然科学的業績にかかわりつつジェイムズ・ウォットやエドモンド・バーク——これまた後年の彼とは対照的な——が示した好意あふれるプリーストリ観なども含めて⁽⁸⁾、それらのものの顕著な例によってプリーストリに間接照明を与えることは興味なしとしないが、しかしそれはここでのわたしの関心事ではない。ここではただ、プリーストリの陣営にあつて、かつ彼を身近に

みる機会のあった人びとのプリーストリ観、あるいはむしろその間の微妙な相違を、とくにもっとも忠実な第一世代と、そして多少の間隔をおいた第二世代との若干の例によって、みてることにしたい。

シェルバン伯のもとを去ってバーミンガムに移るにさいして、化学実験や神学上の研究と著作について、プリーストリは何人もの人びとの財政的援助をうけたことをのちに『回想』のなかで述べ、その名を列挙しているが、とりわけバーミンガムに移ってからの知己の匹頭にウィリアム・ラッセルをあげて、こういつている⁽⁹⁾。

あらゆるよき大義における彼の公的な精神と熱意にはほとんど匹敵するものがない。わたしの彼に負うところは多岐にわたり、かつ不断のものであって、金額で評価しうるものではなかった。会衆のなかのおもだった人びとがわたしの神学的著作の援助をするために200ポンドをわたしに贈ってくれたのは、彼の提唱によるものとわたしは信じている。

また彼は1790年10月、一時的に滞在したリーズからバーミンガム郊外のショウエル・グリーンに住むラッセルの娘マーサにあてた返信のなかで、訪問さきの聖職者とその会衆との状況にかんがみて、バーミンガムにおける彼と彼の会衆にとってのラッセルの重要性を強調しつつ、こう書いている⁽¹⁰⁾。

わたしは当地の会衆の状態からそのような人物の重要性がわかります。ウッド氏はわたしとおなじくらい熱意をもっています。しかし彼にはわたしのよう、自分を支持し、あるいはむしろ導いてくれるラッセル氏のような人がいないのです。彼の講義はかなり成功しているのに、会衆図書室を設立できなかったのも、そのような人がいないためなのです。彼は図書室を推奨する文章を印刷して重要な人びと全部に渡したのですが、きわめてわずかな効果しかありませんでした。これにたいし、わたしはどんなことでも自分が有用だと考えることをただ暗示するだけで十分でした。そうすればそれはたちどころに、もっとも完全に、おこなわれたのです。

プリーストリがラッセルをそのように多としたのもむりからぬことであつた。ラッセルは自分の馬と馬車とを彼の自由な使用に供したし、みづからまとまった金額を寄進したり、会衆仲間に寄進を積極的に呼びかけたりしたからである。それほどに彼はプリーストリにたいして献身的であつた⁽¹¹⁾。

このようなラッセルの態度にてらすとき、彼の息子トマスと娘マーサとのそれぞれのプリーストリ観は興味深い。マーサの回想はバーミンガム事件にかかわって述べられる⁽¹²⁾。彼女の書く事件の経過は、被害者の目をとおしてみられたものとして、それ自体興なしとしないのだが、ここではプリーストリにかんする部分だけに限定しなければならない。事件の夜ニュー・ミーティング・ハウスとオールド・ミーティング・ハウスとを破壊し炎上させた群衆がプリーストリ宅を襲うことは確実だというしらせに、プリーストリはひとまず1マイルさきのラッセル宅に退避した。「夜半12時ごろ、いま自宅は破壊されており、破壊がおわれば、そのあとラッセル家に〔群衆が〕むかうことは確実だというしらせをうけ、かれはふたたび馬車にのって、半マイルほどさきのトマス・ホークス宅にいき、そこで一晩待機することにした。はれた月夜で、とおくまでよくみえた。しかもホークス家は小高い丘の上にあつたため、群衆の怒号や、ドアや家財を破壊する物音があたりの静寂をやぶってきこえてきた」とわたしがかつて要約的に述べた場面⁽¹³⁾に彼女の叙述は接続する。

わたしたちの心の極度の動揺も、わたしたちがすばらしいプリーストリ博士の神聖な相貌を賛賞することを妨げはしなかった。わたしの意見では、いかなる試練においても、どんな人間でも、そのときの彼ほど神聖にみえはしなかったし、われらの救い主に似てはみえなかったはずである。それを集め、使用することが彼の生涯の事業だった、高価で希少な装置と付属品のすべてを含む住居と実験室を破壊している音を、ひるむことなく、彼はきいていた。これらすべての装置、それを使用しての全生涯の営為の跡が無情・無知・無法な一団の山賊によって破壊されているというのに、彼は静かに道路を歩きつ戻りつ歩いてきた。そのしっかりとした、それでいてやさしい足どりは、彼の敵たちの不正かつ残忍な迫害のもとで彼の態度をかくも確固たる焦慮なきものとした完全なおちつき、完全な自足と自覚をはっきりとあらわしていたし、またその顔つきはこの光景からいわば転回してこのにがい菓の調合をうけた人にまじりけのないおだやかな諦観をもたらした最高度の献身を表現していた。その表情にはつぶやきや不平を示すような何ものもなく、いささかの涙もためいきももらされず、諦念と自覚的な汚れなさとの徳さとがそうした人間的感情をことごとく圧伏しているように思われた⁽¹⁴⁾。

ここにみられるのは、崇拜といってよい賛美と畏敬の念である。これを、同様に事件とのかかわりにおいてプリーストリをみようとしたキャサリン・ハトンの叙述とくらべるとき、相違はかなりはっきりしている。

暴動の被害者のひとりウィリアム・ハトン夫妻はユニテリアンではあったが、プリーストリのニュー・ミーティング・ハウスには属していなかった。しかし娘のキャサリンはニュー・ミーティング・ハウス参集者であった。彼女はもともとカルヴィン主義に属していたが、プリーストリの着任とともに、カルヴィン主義をすてて彼のもとに参じたのであった。彼女は1780年12月25日の一友人への手紙でそのいきさつを語っている。そこにはプリーストリへの期待感がよくうかがわれる⁽¹⁵⁾。

有名なプリーストリ博士が自分の科学実験をやりよくするために当地に居を定めました。そしてニュー・ミーティングの説教者のひとり、ホークス氏が辞任したので、その職が博士に提供されました。そして彼はそれをうけいれるだろうと一般に信じられています。もし彼がうけいれたら、わたしが彼の宗教への改宗者になったというニュースをおききになるものと思ってください。わたしはカルヴィン主義の単調さやナンセンスにあきあきしてしまっただからです。

その後の時間の経過は、またとくに事件の経験は、彼女のプリーストリ観にどう影響を与えたであろうか。ミーティング・ハウスでの機会のほかに、彼女はプリーストリを比較的身近にみる機会をもった。彼女によれば、プリーストリはウィリアム・ハトンに敬意を抱き、しばしばハトン家を訪れてティーをともにしたからである。そして事件の1カ月余りのち、8月25日の手紙で、彼女は事件とのかかわりでプリーストリにふれている。

バーミンガムをとくに害悪のおこりそうな場所にしたのは、プリーストリ博士の熱意——過度ではないが、強烈な——でした。自分は宗教的に正しいと完全に信じていましたので、彼は世間に出て行って、その真実をすべての人間に説得するのが自分の任務だと考えていました。これは人間の誤りやすい心に生じたどんな考えよりも多くの害悪をひきおこした考えだったので。彼はまた、説教のなかで、政治に一瞥を加えました。政治というものはけっして宗教と混合してはならない題目なのです。……わたしはプリーストリ博士を、

国王と祖国に愛着をもち、万人に善意をもった、よい人だと思います。しかし彼は他人の心のなかに頑迷さやあらゆる無慈悲さをひきおこすことによって、バーミンガムの暴動の主原因の一つ——意図せずしてではありますが、また彼自身その被害者ではありますが——であったとわたしは思うのです。彼は自分ではまちがったことをしたとは全然意識していませんでしたので、いいえ、ただ正しいことしかしなかったと確信しておりましたので、彼の友人たちは彼を家からほとんど力づくでつれだし、彼を八つ裂きにでもしかねない暴徒たちの復讐心から彼を救出したのでした⁽¹⁶⁾。

ここにみられるのは、プリーストリにたいする敬意はあくまでも保持しつつも、醒めた目で彼を観察している態度である。彼女はおなじ文章のなかで、暴動の原因を煽動に帰している。

この憤激した暴徒たちがもともとだれかに煽動されたことには疑いの余地がありません。民衆が欠乏や抑圧のために、パンや税のために集結し、暴動をおこすことはあるでしょう。しかしフランス革命を記念するために何人かの紳士が会食したことで教会と国王が危険だという理由から、仕事を放りだして隣人の家を焼いたりする機械工がいるものでしょうか。もしもそういう考えが意図的に心のなかに注ぎこまれないならば。民衆を誘って暴動をおこさせるために密使たちがロンドンから送られたのだといわれています。もしそうだとすれば、それを抑止すべきはずだった当地の人びとの支持を彼らはすっかり手にいれてしまったのです。治安判事がホテルのまえに集まった暴徒たちにまざり、彼らを静めるのではなく、逆に害悪をひきおこすように彼らを勇気づけたことは確実です。治安判事が二つのミーティング・ハウスとプリーストリ博士の家の破壊をよろこんだこともおなじように確実だとわたしは信じています。その時点で彼らはとめたかったのだが、とめられなかったのだとわたしには思われます。自分たちには前進をとめられないような力をもったエンジンを彼らは動かしてしまっただけです⁽¹⁷⁾。

このように事件の原因は「だれか」の、そして「治安判事」の煽動にあると彼女はみている。しかし、さきの引用文にみたように、彼女は責任の一部をプリーストリの性格と行動にも帰しているのである。こうした彼女は客観的に、そして多少とも批判的な目で、プリーストリをみようとしていることがわかる。

マーサ・ラッセルとキャサリン・ハトンとの相違を後者の方向に延長したところに、トマス・ラッセルがいる。事件当時の彼のプリーストリ観はわからない。彼の回想はアメリカ移住後のプリーストリにかかわっている。それは「ノーサンバランドにおちついてまもなく、彼はフィラデルフィア・カレッジの化学教授の後任に擬せられたが、化学を教えるよりは、ユニテリアン主義の説教の機会の方をこそ望んだ」という、わたしの旧著における、彼の生涯の部分⁽¹⁸⁾に接続する。

トマスは「大都市というものはこれまでつねに墮落の住み家でしたが、フィラデルフィアもこの一般法則の例外ではありません」と父ウィリアムへの手紙で感想を伝えるほどに、またプリーストリの同地での説教には副大統領アダムズや何人もの議員を含む多数の出席者があったが、その多くは好奇心にかられて来会したのであり、彼らの心は「彼の説教から多少とも持続的な利益をうけるにはあまりにも現世的であった」というほどにも、宗教的な心情の持主であった。

宗教の大義は彼のような学識ある公明な人すべての努力を必要とする。合理的なキリスト教思想をひろげ、従来キリスト教の真の形態をかくしてきた迷信と偏見を除去することに

よって、この大義は、現在この市全体に容赦のない速度でしのびよっている不信仰の過程を、おそらくある程度は阻止することができるかもしれない⁽¹⁹⁾。

このフィラデルフィア訪問のあいだプリーストリは同地のラッセル宅に滞在した。むろんウィリアムのすすめによる。その間プリーストリは啓示の明証について一連の説教をした。説教は1日1度だけしかおこなわれなかったため、それをおわるには、この冬中、4月までの滞在が必要となった。トマスは公人である宗教者としてのプリーストリを「学識ある公明な人」とみなすことをためらわなかった。しかし長期間の同居人として接する私人としてのプリーストリにたいしては、彼はおのずから別様の感情を抱くようになった。

プリーストリ博士は、疑いもなく、きわめて有徳な、学識のある、気持のよい人である。そして彼の名は偉大な学者として、またこれまでカソリックの信仰だけでなくプロテスタントの信仰をも蔽っていた迷信と偏見とを追跡することによって、宗教をあえて理性と常識との法則に帰した人として、後世に伝えられていくであろう。しかし彼は、その人との家庭的交際からよろこびを感じることができるような人ではない。家庭のちいさなできごとからでも、彼は不満を感じ、おこりっぽくなりやすい。万事が自分の思うとおりにいかないと、そのとおりになるまでは、そしておそらくそのあとでもしばらくは、彼はいらしている。要するに彼は大事においてはあれほど公平に行動する人からは思いもよらなかったような、ある程度の利己主義を示すのである。だが、あらゆるできごとや環境をつうじて首尾一貫した性格などという資格を正当に要求できる人がいるであろうか⁽²⁰⁾。

註

1. Edinburgh University Library, *Dr. Joseph Priestley, A Scottish Perspective: Catalogue of an Exhibition of Books and Manuscripts in Edinburgh University Library, May-June, 1992*.
2. 「ある父と娘」、『鐘』, no.8. 1981年9月。杉山忠平『窓辺から』, 未来社, 1986年, 183-87ページに所収
3. Anon., *Observations of the Emigration of Dr. Joseph Priestley*, Philadelphia, 1794, p.59.
4. Cobbett, William, *Remarks on the Explanation by Dr. Priestley*, Philadelphia, 1799, pp.8, 9, 30, 31.
5. *Ibid.*, p.29.
6. Anon. (a Welsh Freeholder [Jones, David]), *Thoughts on the Riots at Birmingham*, Bath, 1791, p.24.
おなじ筆者による *Strictures on a Pamphlet, Entitled, Thoughts on the late Riot at Birmingham*, London, n.d.
7. Anon. (a Member of the Established Church: Parr, Samuel), *A Letter from Irenopolis to the Inhabitants of Eleutherapolis; or, A Serious Address to the Dissenters of Birmingham*, Birmingham, 1792, p.18.
8. ウォットのプリーストリ宛の一書簡について Schofield, R. E., 'James Watt's Letter to Joseph Priestley 26 April 1783', *Annals of Science*, vol.10, no.4, 1954 がある。

パークとプリーストリとの交友については杉山忠平『理性と革命の時代に生きて』, 岩波書店, 1974, 111ページ, 両者の訣別については, 同書, 120ページ以下を参照。なお前者の点についてプリーストリのパーク宛一未公開書簡を扱った, Armytage, W.H.G., 'Joseph Priestley and Edmund Burke: an

- Unpublished Letter', *Annals of Science*, vol.12, no.2, 1956 がある。
9. Rutt, J.T., *Life and Correspondence of Joseph Priestley, LL.D., F.R.S., & c.*, London, 1831-32, vol.1, pp.215-16.
 10. *Ibid.*, vol.2, pp.86-87.
なおこの点については Jeyes, S.H., *The Russells of Birmingham in the French Revolution and in America 1791-1814*, London, 1911, p.275 がふれている。
 11. Jeyes, *loc. cit.*
 12. Russell, Martha, typescript 'On the Birmingham Riots 1791 July 14' (Birmingham Reference Library).
 13. 杉山, 前掲書, 149ページ。
 14. 上記 Martha の手記をもとに書かれたと思われるものに, 次の資料がある。'Journal relating to the Birmingham Riots, by a Young Lady of one of the persecuted Families', *The Christian Reformer*, vol.2, no.17, May 1791.
 15. Hutton, Catherine, *A Narrative of the Riots in Birmingham, July 1791*, privately printed in 1875, pp.24-25n.
 16. *Ibid.*, p.24.
 17. *Ibid.*, pp.25-26.
 18. 杉山, 前掲書, 195ページ。
 19. Jeyes, *op. cit.*, pp.268-69.
 20. *Ibid.*, pp.269-70.

(元一橋大学社会科学古典資料センター教授)

J.-F. ムロンの「システム」論 (1) On the "Systèmes" of J. -F. Melon

津 田 内 匠
TSUDA Takumi

カンティロンの『商業試論』（以下『試論』）は著者の死後21年も経て突如パリに現われたのであるが、著者がロンドンで無残な死を遂げた1734年には、たまたま、実はカンティロンと密接な関係のあった匿名書が出版されている。いまはほとんど忘れられてしまったが、『試論』の出現以前には『試論』に劣らぬ重要な意義を担ったジャン・フランソワ・ムロンの『商業に関する政治的試論』（J.-F. Melon, 1675-1738. *Essai politique sur le commerce*. 以下『政治的試論』）である。

カンティロンの『試論』は当時の英仏経済学の接点にあった。『試論』の重要さも魅力もひとつはそこにあるのだが、彼はベティの労働価値論や政治算術論、ロックの機械的貨幣数量説やニュートンの金銀比価論等、ことごとく大いに批判的にはあるが、ともかく当時のイギリス経済学の特徴をよく伝えているのに、肝心のフランス経済学については、ヴォバンの『国王の10分の1税案』を非現実的とするだけで、当時最大の問題であったジョン・ローの「システ